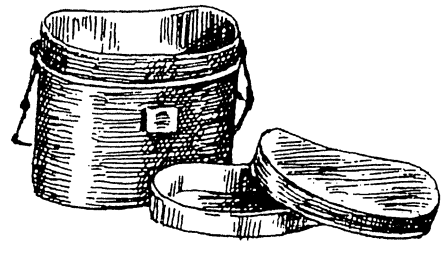
不戦の66年、着手から14年、渾身の力作

送出県福島発 学徒勤労動員の全記録

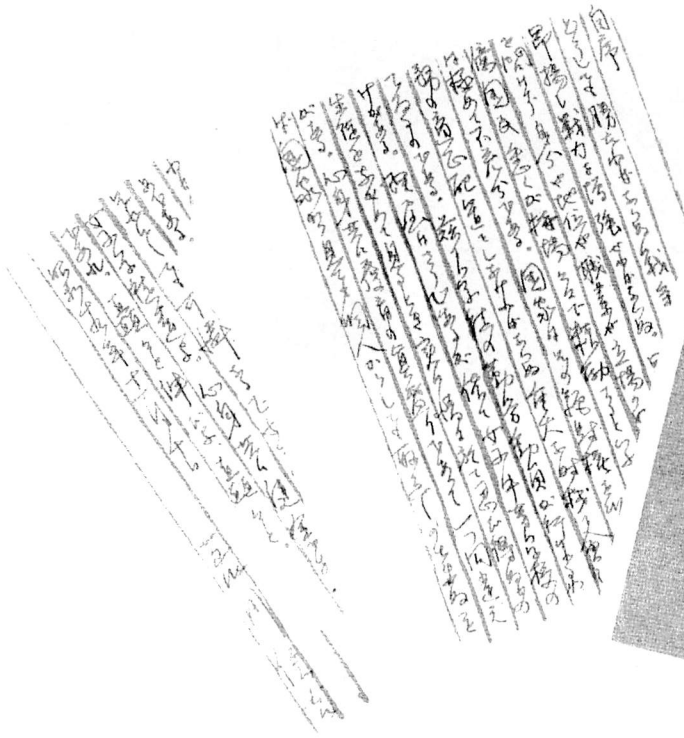
空襲から避難の学徒、地震・津波・原発事故から避難
ドキュメントとオーラルストリーによる失われた校史の再生

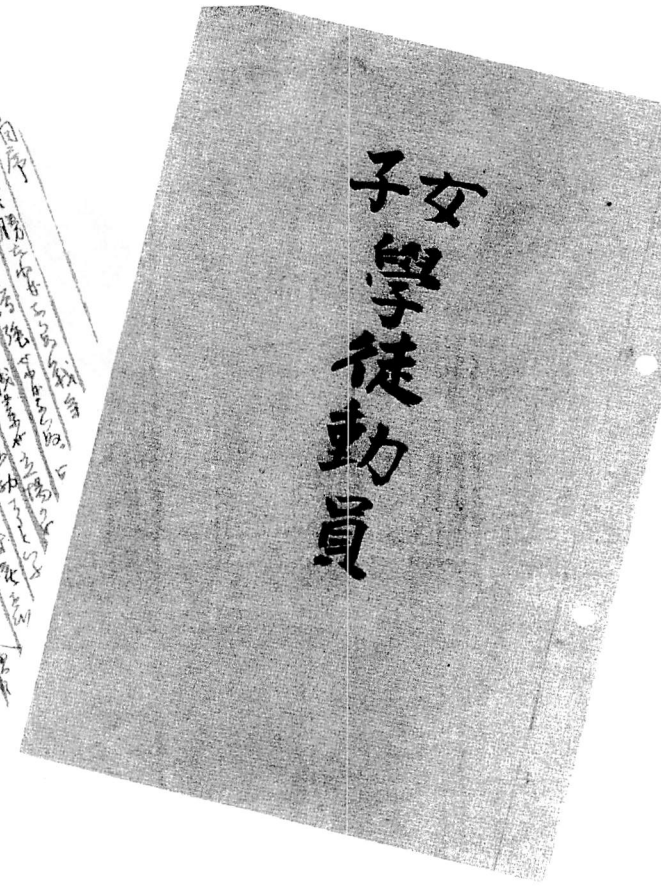
不戦の六十五年にあたり
戦時下の少年少女たちの命がけの青春の思いと
少数の良心が遺したわずかな記録を
現在および未来の少年少女たちに贈る

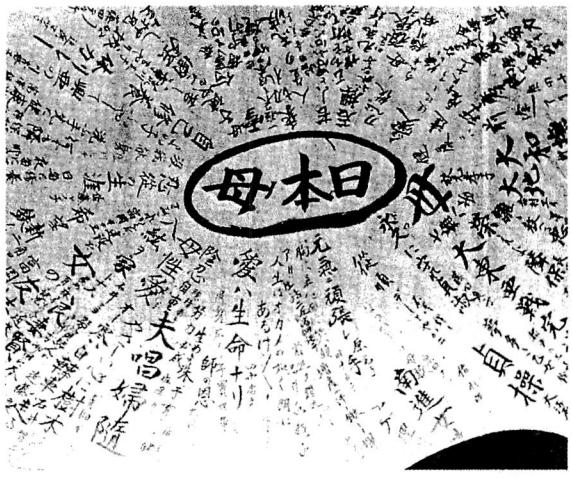
福島の学徒勤労動員を記録する会



荒川信吉の遺品
「女子学徒動員」と自序

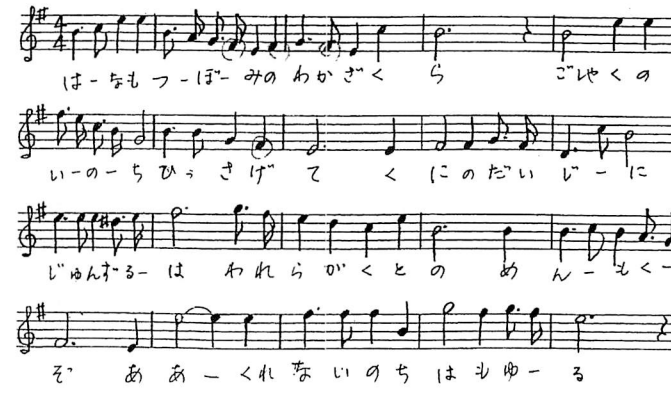






棚倉高女生の寄せ書き

学徒動員の歌

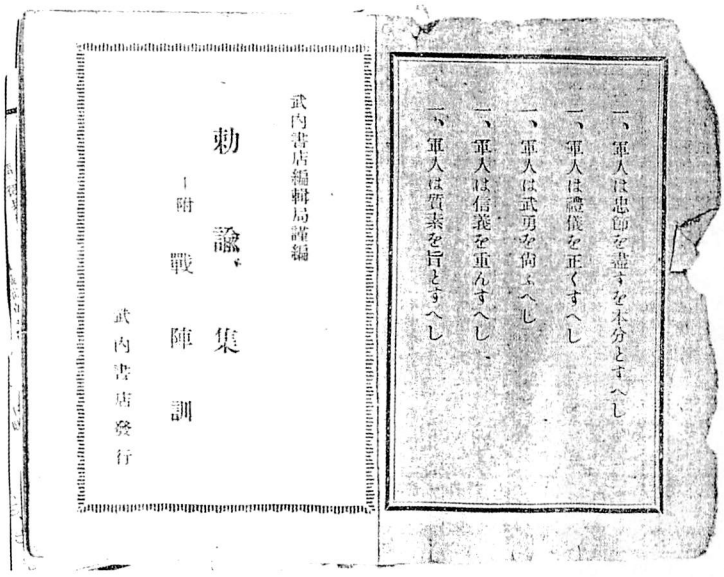


学徒動員の歌

花も蕾の若桜
五尺の命ひっ下げて
国の大事に殉ずるは
我等学徒の面目ぞ
あゝ紅の血は燃ゆる

後に続けと兄(姉)の声
今こそ筆を擲げ打ちて
勝利ゆるがぬ生産に
勇み立ちたる強兵ぞ
ああ紅の血は燃ゆる

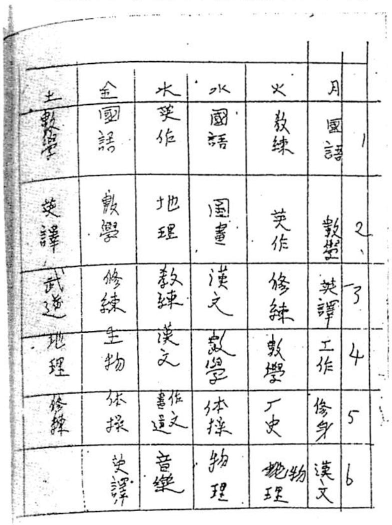
君は鍬取れ、我は鎚
戦う道に二つ無し
国の使命を遂ぐるこそ
我等学徒の本分ぞ
ああ、紅の血は燃ゆる



◀甲種食糧増産隊「勅諭集」

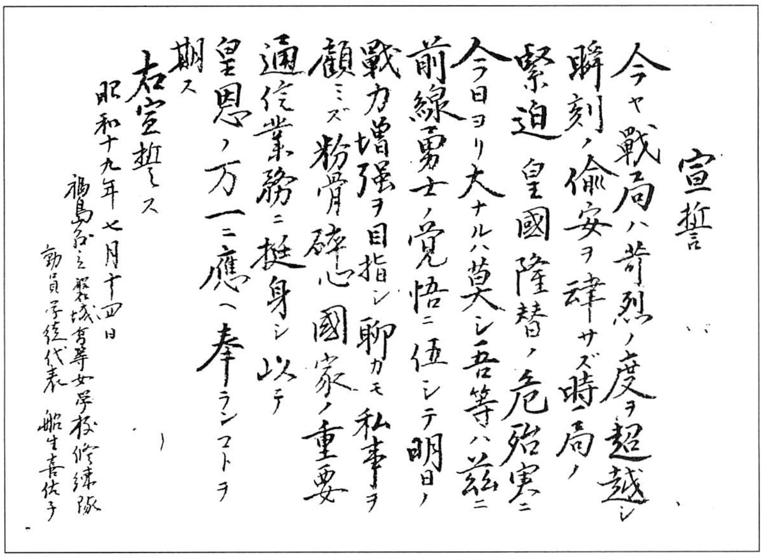
◀ランドセル（福島高女）

保原中学校の時間割（1943年）



	月	火	水	木	金	土
1	國語	教練	國語	英作	國語	數學
2	數學	英作	圖畫	地理	數學	英譯
3	英譯	修練	漢文	教練	修練	武道
4	工作	數學	數學	漢文	生物	地理
5	修身	國史	体操	作文 書道	体操	修練
6	漢文	~~地理~~ 物理	物理	音樂	英譯	

1．戦時下での登校は、国防色一色、戦斗帽に背嚢を背負い、ゲートルであった。



宣誓

今ヤ戰局ハ苛烈ノ度ヲ超越シ瞬刻ノ偸安ヲ許サズ時局ノ緊迫皇國隆替ノ危殆寔ニ今日ヨリ大ナルハ莫シ吾等ハ茲ニ前線勇士ノ覚悟ニ伍シテ明日ノ戰力増强ヲ目指シ聊カモ私事ヲ顧ミズ粉骨砕心國家ノ重要通信業務ニ挺身シ以テ皇恩ノ万一ニ應ヘ奉ランコトヲ期ス

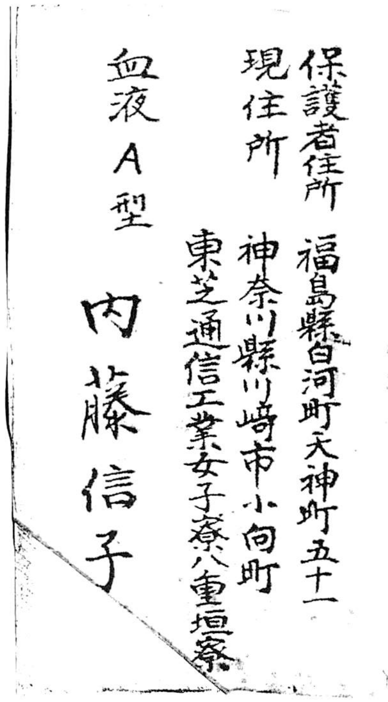
右宣誓ス

昭和十九年七月十四日

福島県立磐城高等女学校修練隊

動員学徒代表　船生喜代子

磐城高女学徒の「宣誓文」



保護者住所　福島縣白河町天神町五十一

現住所　神奈川縣川崎市小向町

東芝通信工業女子寮八重垣寮

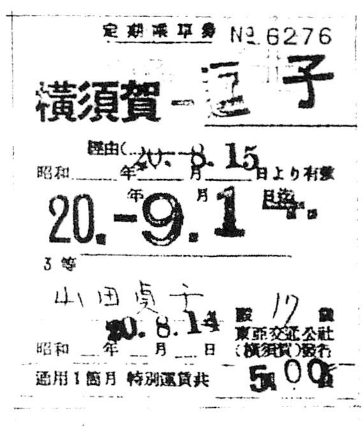
血液A型

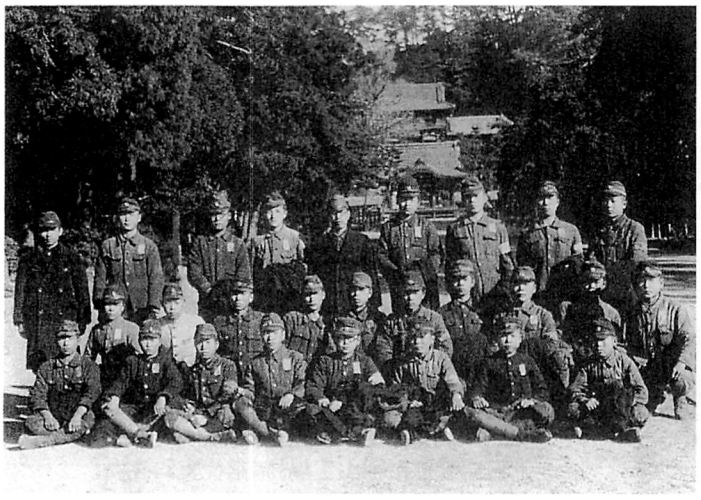
内藤信子

白河高等女学校学徒の東芝通信の
名札
食券
バッジ

◀日東工砿での作業服姿（福島高女）

▶品川計器での作業服姿（福島高女）

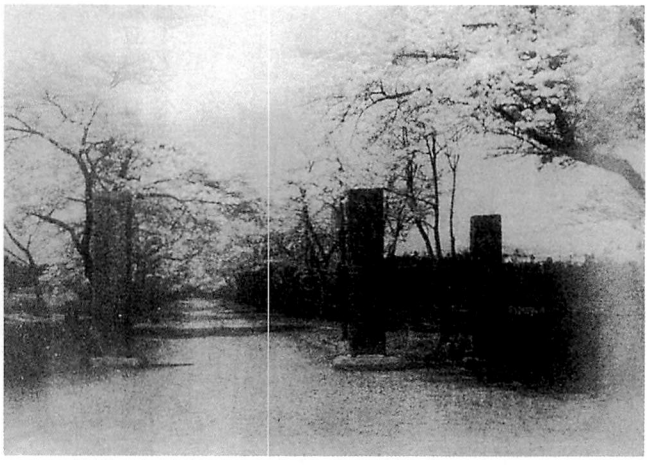




会津中学校 ヂーゼル自動車第二班 下駄履きの学徒もいる。

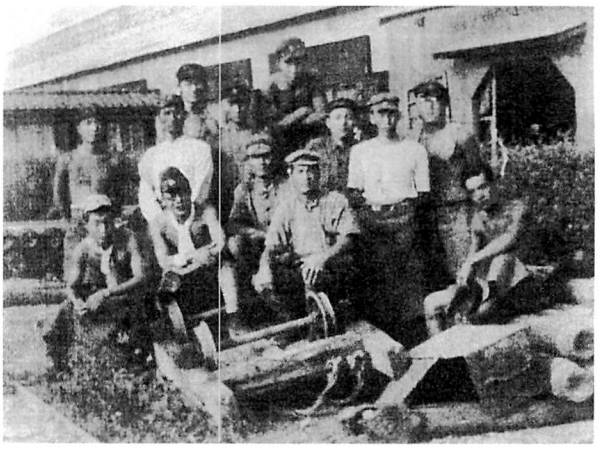
日東化学動員の保原中学校学徒の社員章・学割証明書・定期乗車券

◀履物も十分になく草履をはいていた者もいる。沢田飛行場へ動員の学徒



▶東白川農蚕学校・田村蚕業学校が動員された陸軍軍馬補充部（西郷村）

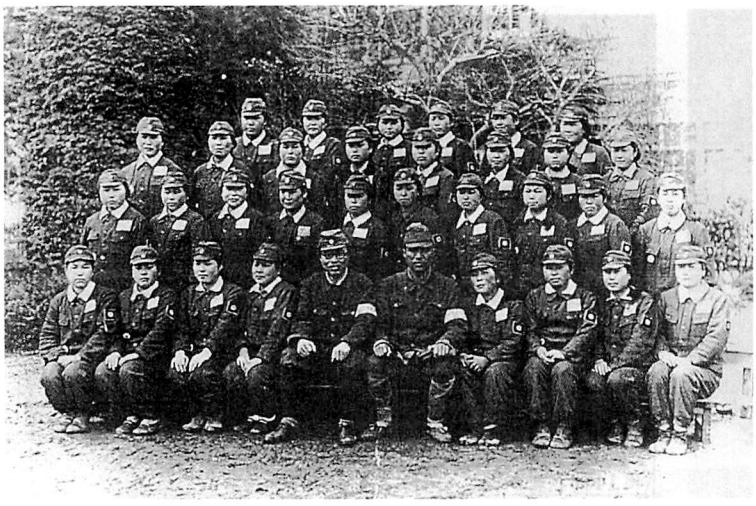
◀藤沢の横河電機に動員された棚倉高女、女子挺身隊員



▶福島経済専門学校三年（二十一回生）不二越鋼材岩瀬工場（富山市）

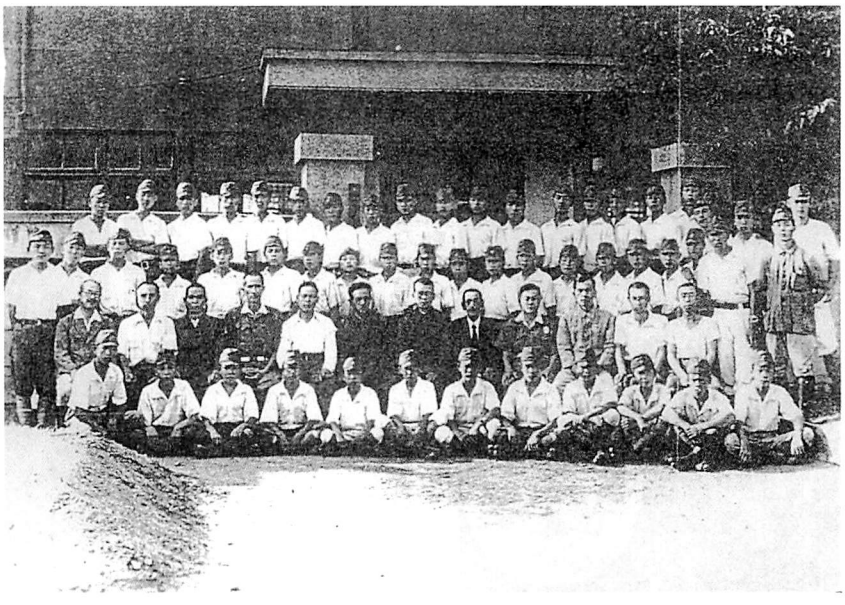
◀海軍工廠に動員された川俣高女の学徒、春日寮は号室の六人。

▶大日本兵器福島工場正面玄関前（梁川高女）

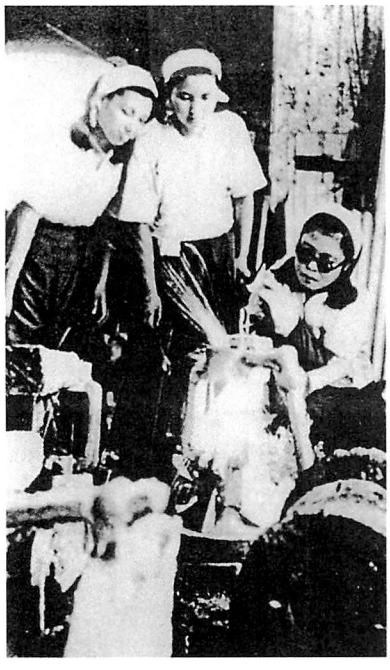


中島飛行機尾島工場に動員の福島師範
（皇国2021工場）　尾島国民学校にて

作業服姿で麓山公園にて
日東工鉱業郡山工場　猪苗代実科高女



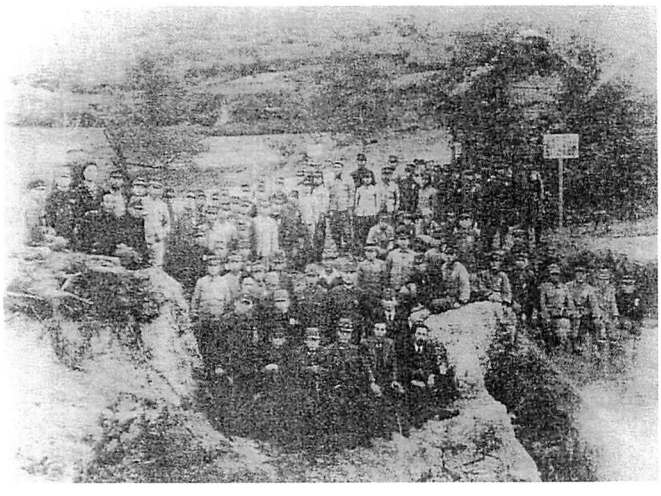
▶私立福島電気工業学校生　総員四十九名
日本アスベスト入社の日



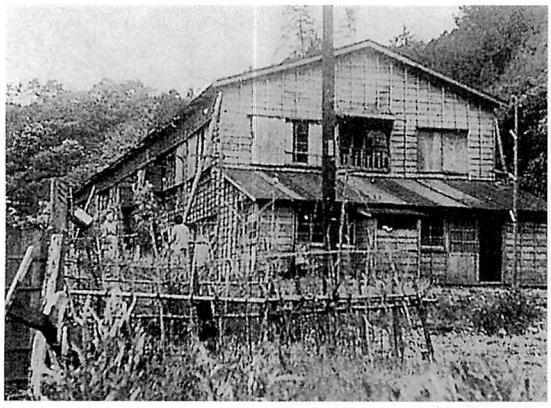
◀日東工砿での作業　昭和二十年

▶品川白煉瓦に動員された浪江
高女女子挺身隊員（白割烹着）

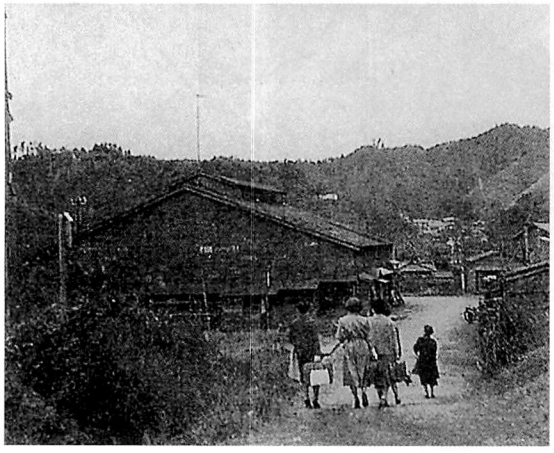
私立石川中学　石川山にて視察に来た軍関係者
や森校長と一緒に写す　20年６月ころ



▶新名高女生と五十五年ぶりに
再会した若松高女生
小田原の国産電機跡地にて

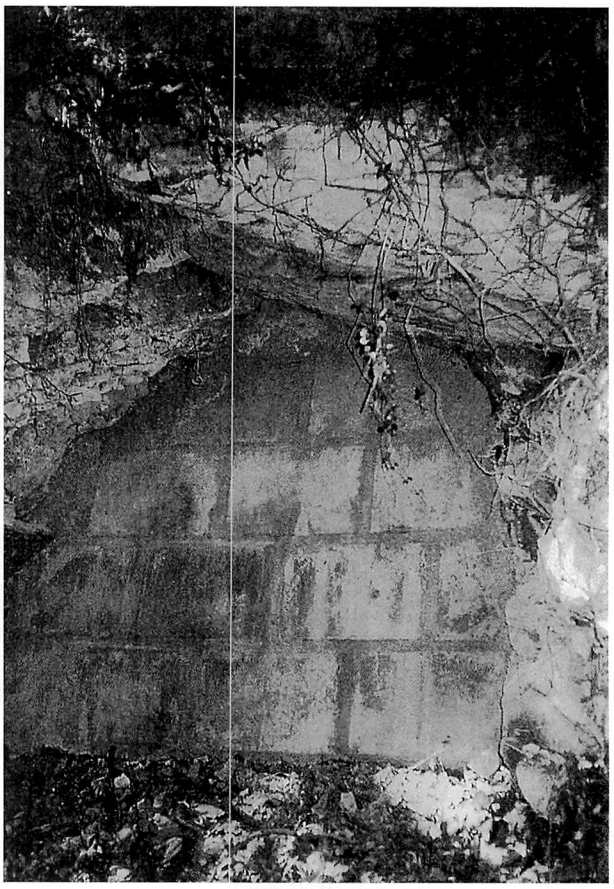


◀沼間第四寄宿舎第七号

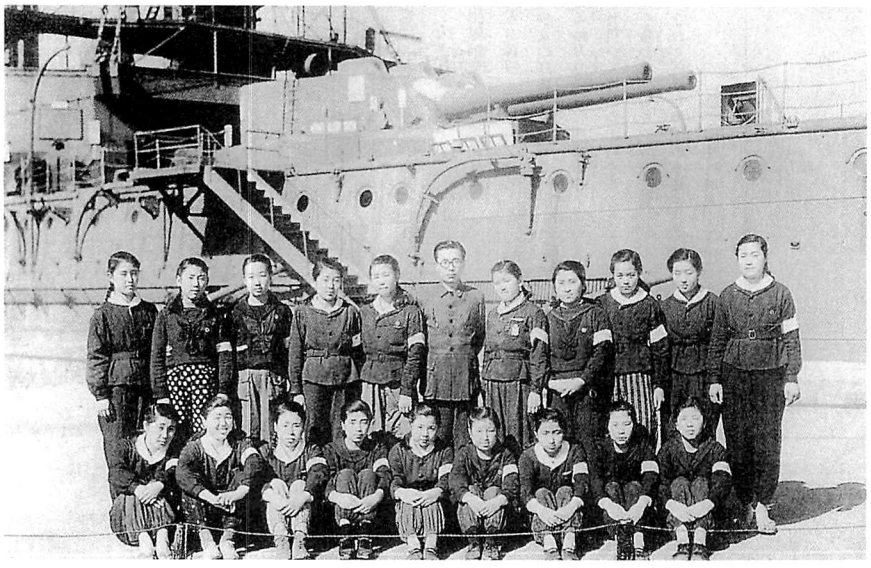


◀烹炊所（集会所）周辺

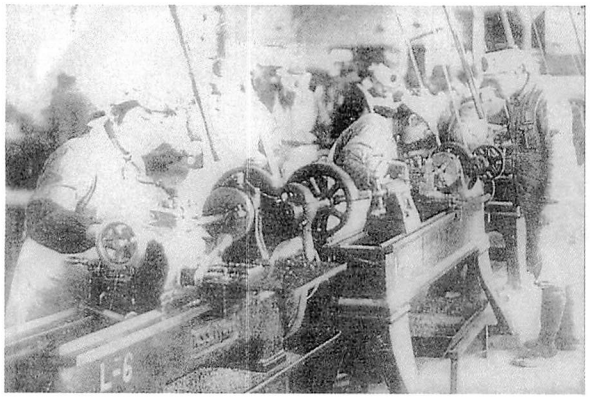
▶今は閉ざされた壕の入口



昭和33年撮影

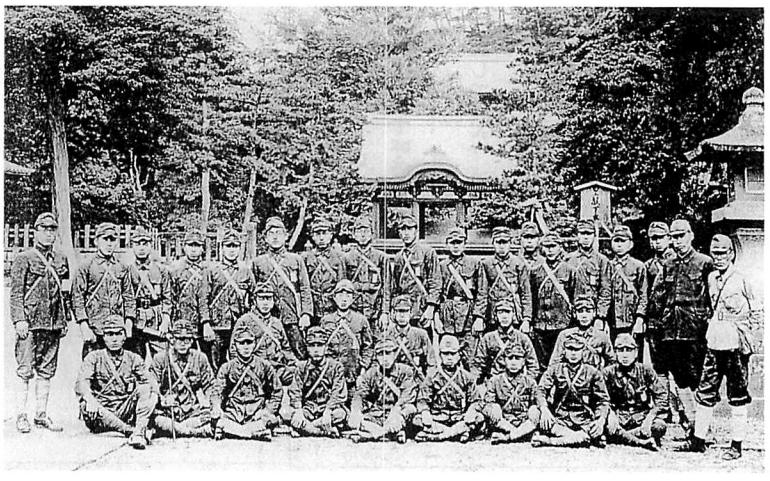


◀福島高等女学校敷島隊
昭和二十年五月十六日、海軍工廠造機部
設計係写図班三笠記念艦にて
中央は青島弘武指導員

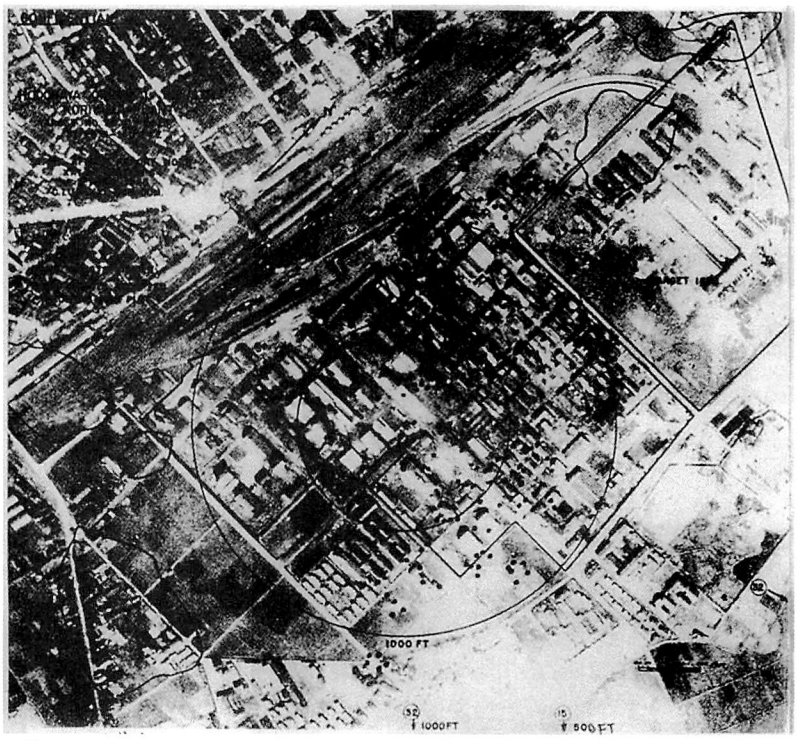


小田原市、国産電機小田原工場
地元の新名高女学徒（通勤）とともに若松高女学徒も就労した。
新名高女学徒からふかしたイモを貰ったり、湿地に自生したクレソンを摘んで調理して貰ったり。

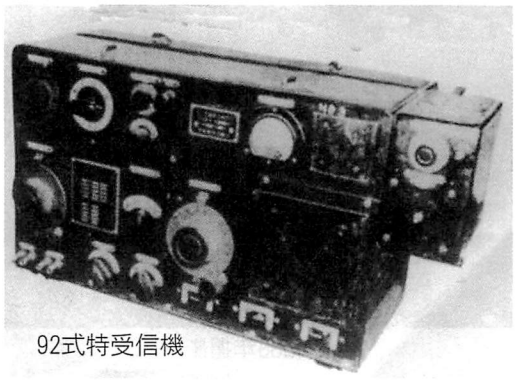
住友特殊製鋼株式会社動員記念（昭和19年10月13日　鶴岡八幡宮にて）
福島師範学校本科２年東組



保土ヶ谷化学動員の学徒たち
防毒マスクと地下足袋で（ドラム職場の人たち）

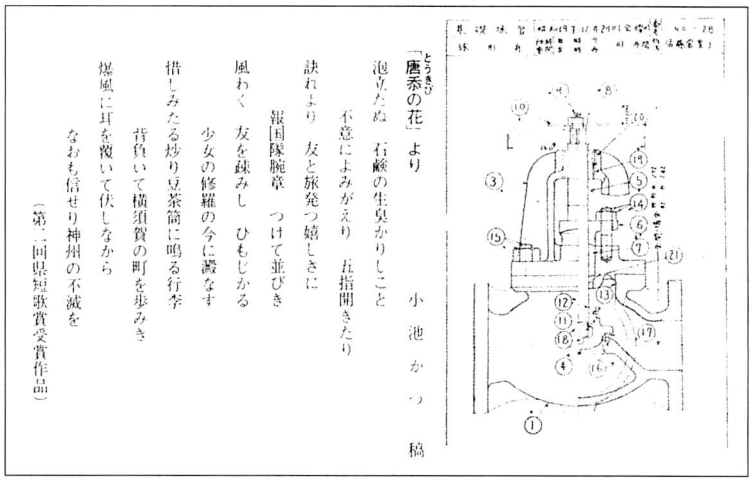


『ターゲット2025』より　アメリカ軍の空爆記録・保土谷化学郡山工場



92式特受信機

沖電気で1944年製造開始の海軍用航空無線機

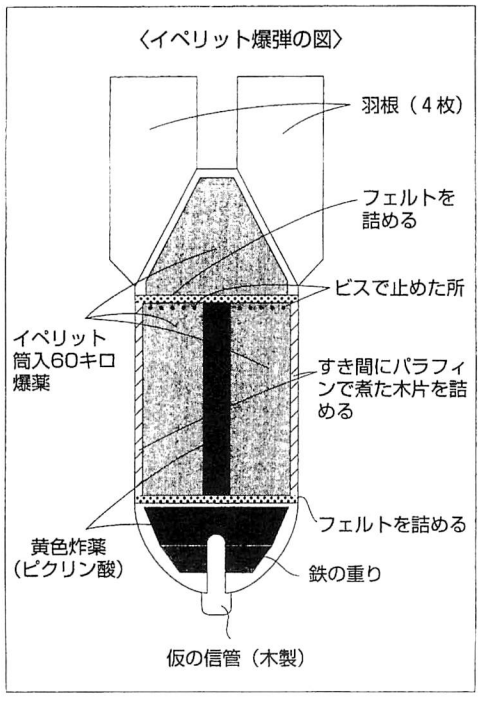


「唐糸の花」より　　小池かつ稿

泡立たぬ　石鹸の生臭かりしこと
不意によみがえり　五指開きたり
訣れより　友と旅発つ嬉しきに
報国隊腕章　つけて並びき
風わく　友を疎みし　ひもじかる
少女の修羅の今に灘なす
措しみたる炒り豆茶筒に鳴る行李
背負いて横須賀の町を歩みき
爆風に耳を覆いて伏しながら
なおも信せり神州の不滅を

（第二回県短歌賞受賞作品）

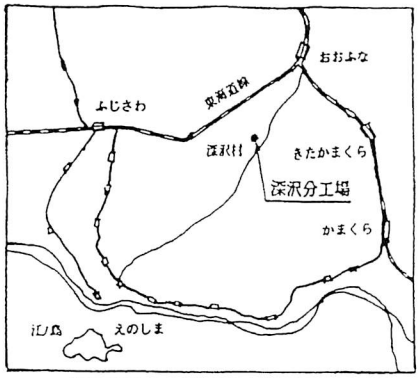
（参考）　相模海軍工廠で製造のイペリット爆弾



第二工場へトロッコを押してイペリットの容器を取りに行く。トロッコに容器を乗せてくれるまで外で待ち、息を止めて中に入り、トロッコを外に押し出すまで呼吸することはできなかった。中には厚いゴム合羽を着て防毒面をかぶった工員が働いていたが、気の毒だった。戦後使われたホリドールという強力殺虫剤と同じ臭いが工場内に充満していた。工員の頬は黒く、目は赤く、唇はまくれて白く、肺はただれていたようだった。

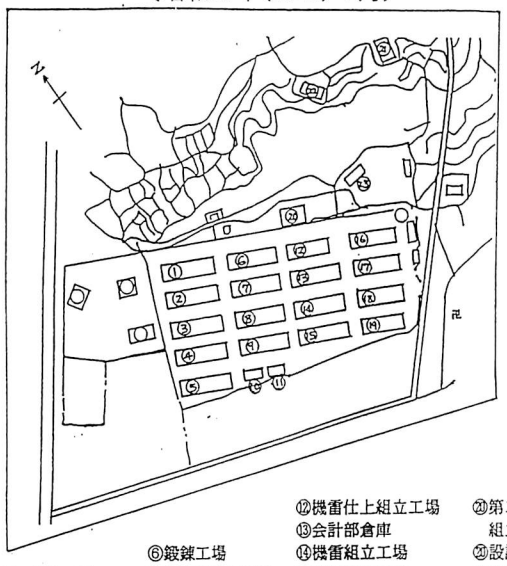
第三工場の空き地で出征する第二工場の工員の壮行式があった時、工員が駆け足で四〇人くらい出て来た。ところが壮行式どころか、工員たちの咳が止まらず苦しがって座り込んでしまった。みな血のまざった、べっとりとした痰を吐いて、身の毛もよだつ凄惨な姿だった。もう戦争はいい、早く平和が来るように、と祈った。それでも、みな口を押さえながら工場へ帰って行った。こんなかわいそうな光景は、第三工場にいた少数の日川中学生しか知らない。

深沢分工場位置図

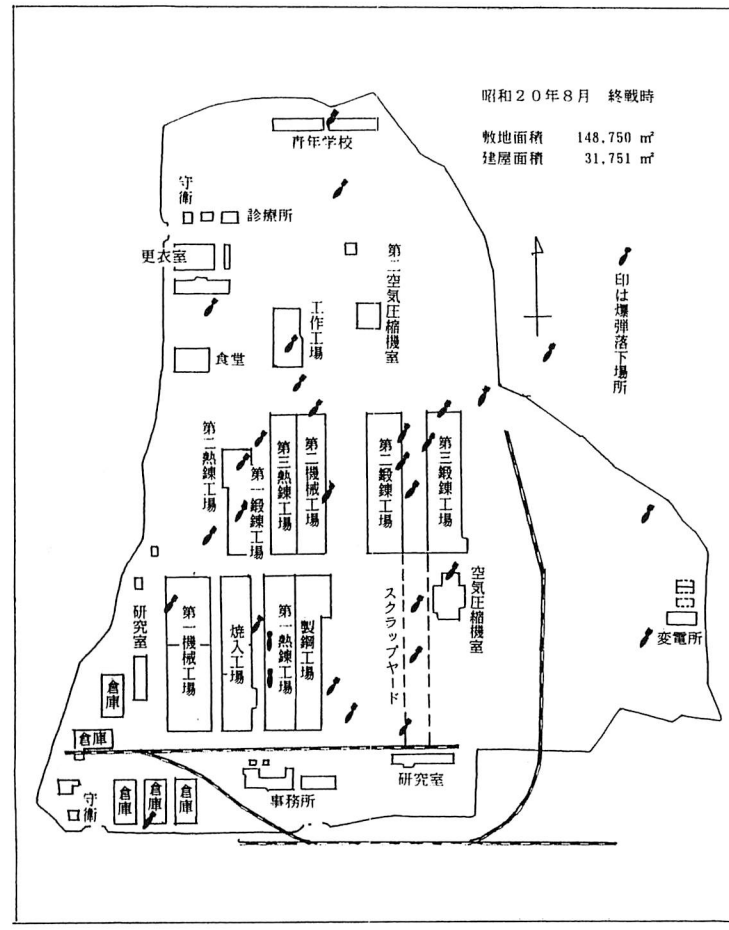


坂下高女が動員された
横須賀海軍工廠深沢分工場

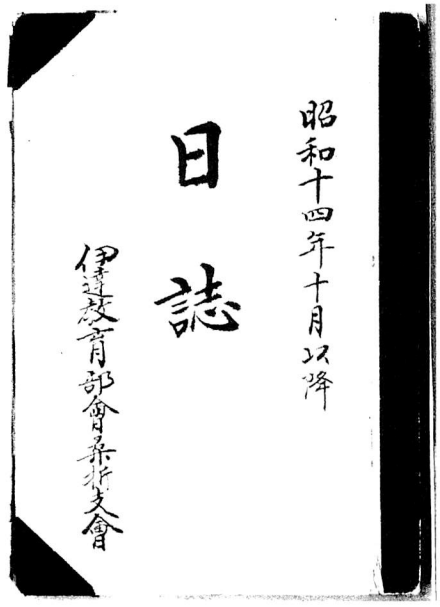
横須賀海軍工廠造兵部深沢分工場計画図
〔昭和20年（1945）1月〕



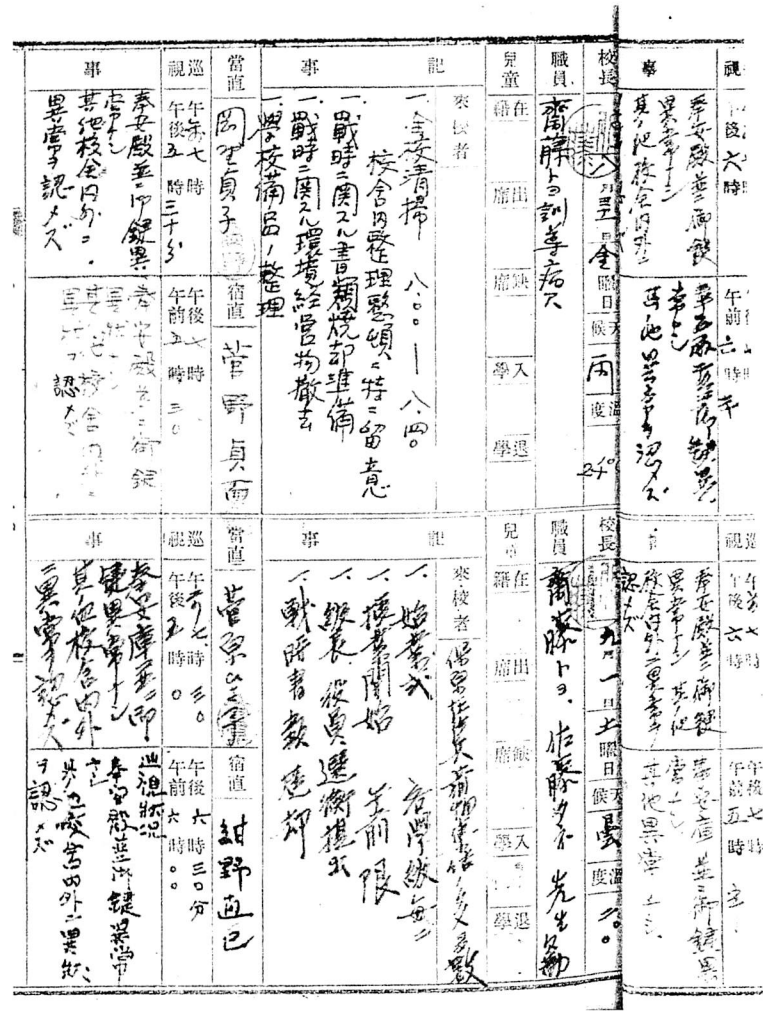
① 鋳造工場
② 製缶・銅工場
③ 魚雷部品工場
④ 魚雷部品工場
⑤ 魚雷縦舵機工場
⑥鍛錬工場
⑦器具半作品工場
工員更衣所食堂
⑧魚雷組立工場
⑨器具手作品工場
⑩発電工場
⑪京炊所・物資部
⑫機雷仕上組立工場
⑬会計部倉庫
⑭機雷組立工場
⑮機雷組立工場
⑯音響機械・板金工場
⑰音響仕上・組立工場
⑱音響調整・試験工場
⑲会計部倉庫
⑳汽缶場
㉑第二魚雷組立工場
㉒設計係
㉓事務所



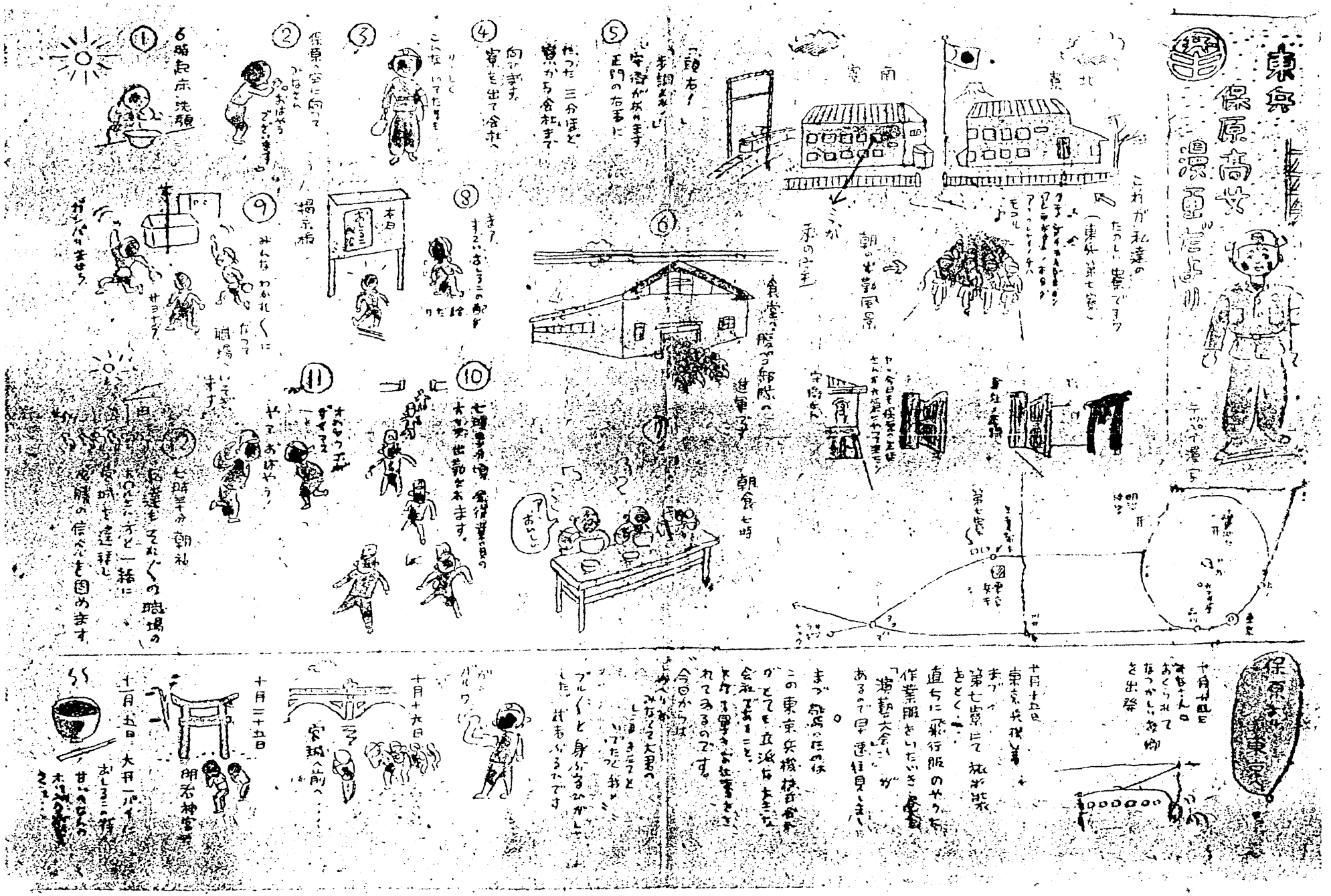
藤沢飛行場
【７月30日空襲時の爆弾落下地点】

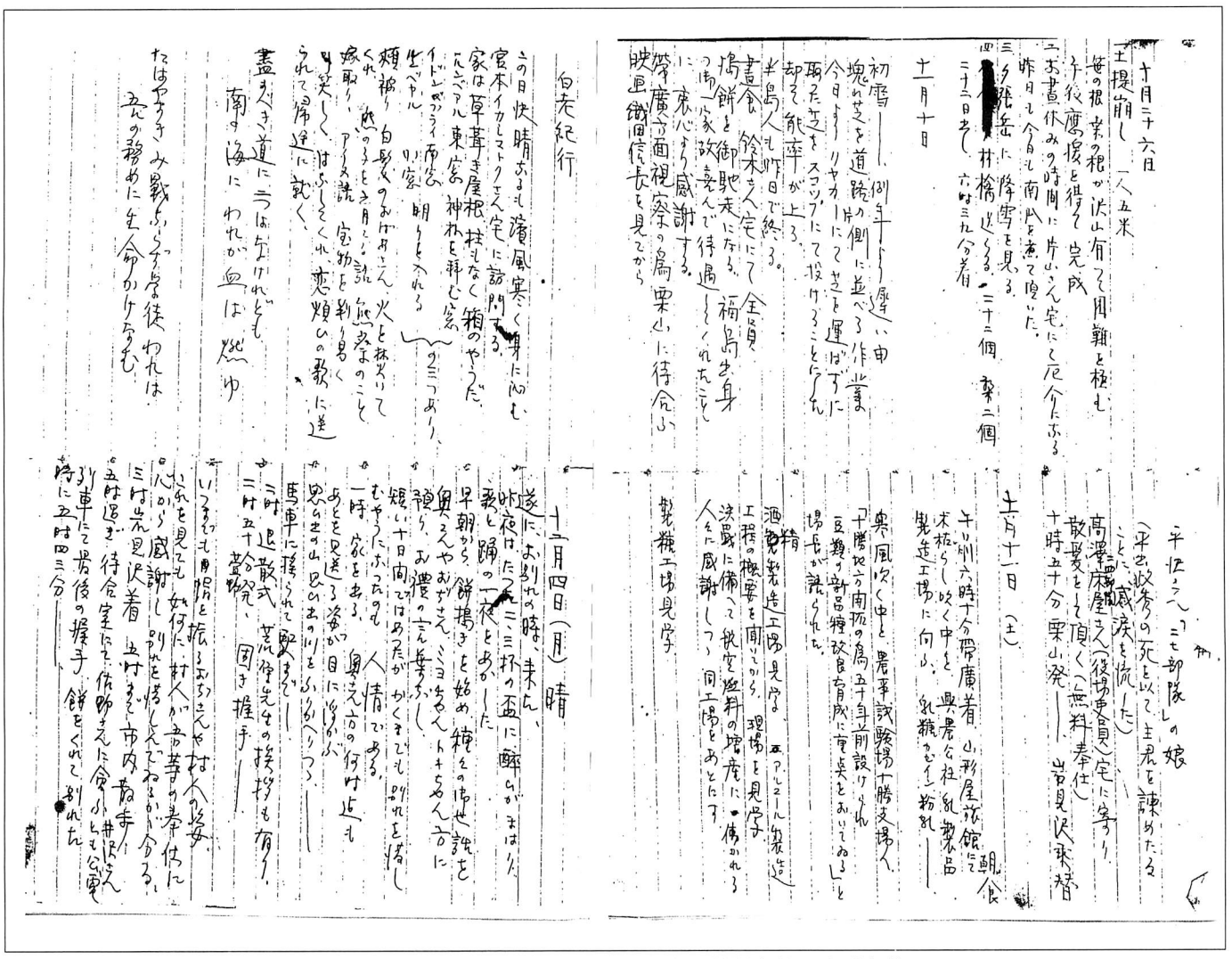


満蒙開拓青少年義勇軍、陸海軍志願兵、農兵隊、戦時書類の廃棄が記入されている。

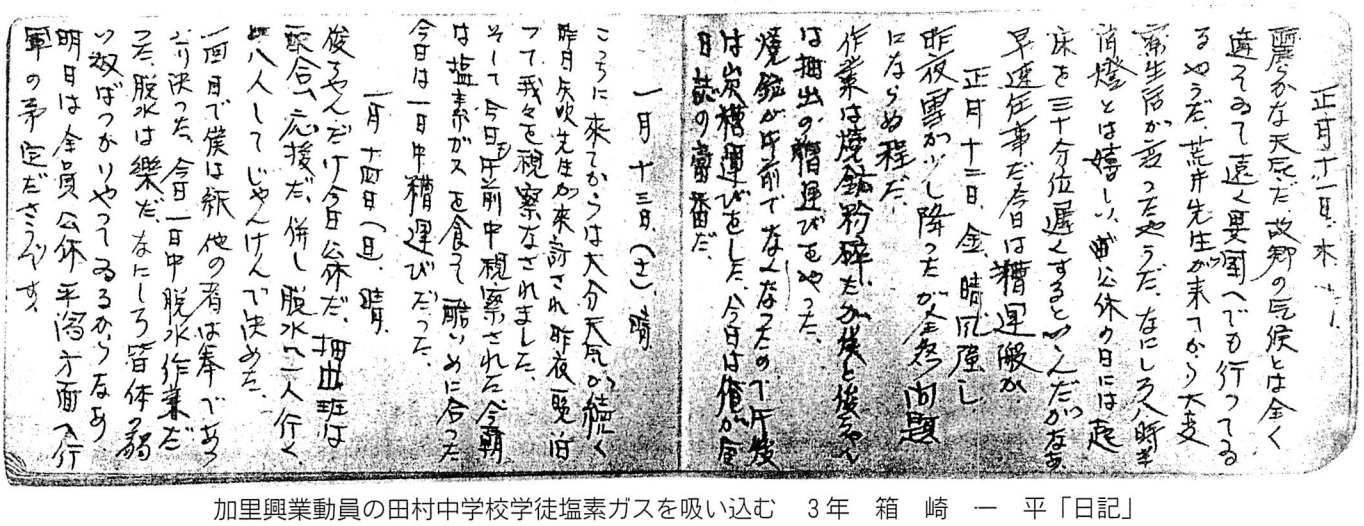


桑折醸芳国民学校「学校日誌」（昭和二十年八月三十一日）


東京
保原高女
漫画だより
6時起床 洗顔
保原の空に向って
おはようございます
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
朝食七時
七時半から朝礼
みんなわかれてくに
職場いきます
七時半から朝礼
十月十五日
十月十九日
十月二十五日
十月十五日
明治神宮
保原の
東京
東京兵機動員の保原高女学徒の「漫画だより」



福島青年師範学校２年　佐藤登の北海道勤労奉仕日誌「白樺」



加里興業動員の田村中学校学徒塩素ガスを吸い込む　３年　箱　崎　一　平「日記」

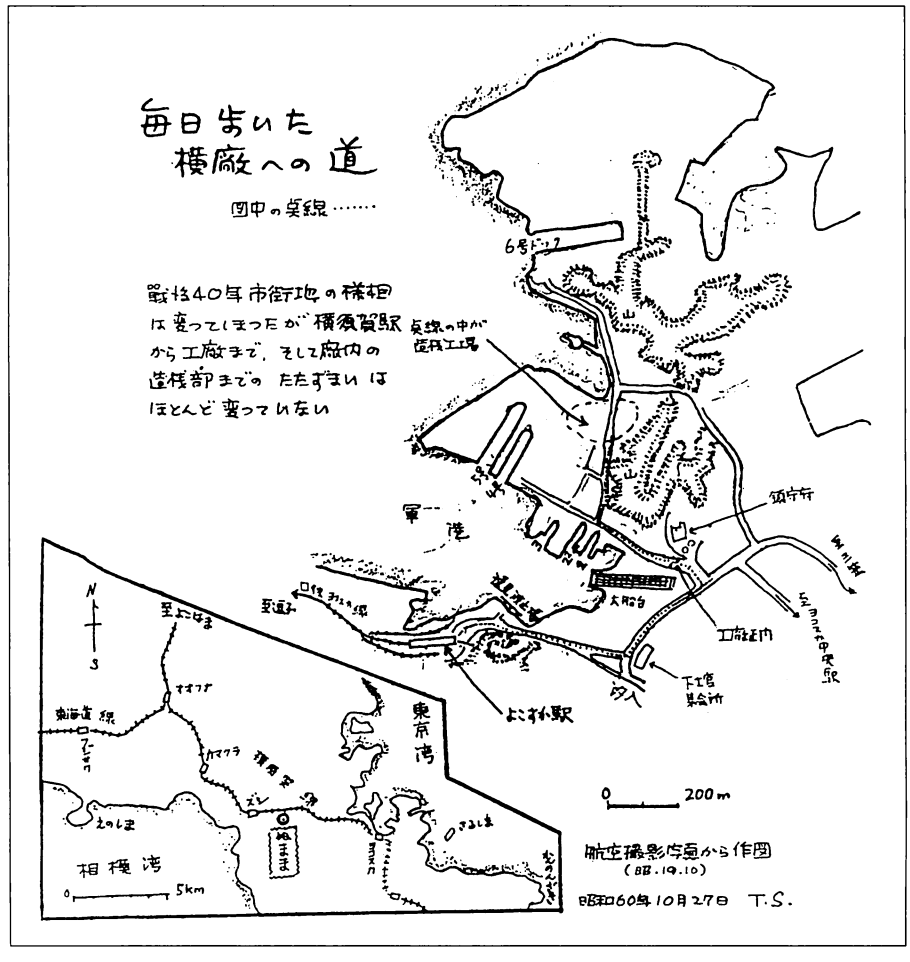
動労動員された
石川・沢田・野木沢地区の略図

は動労動員で働いた場所

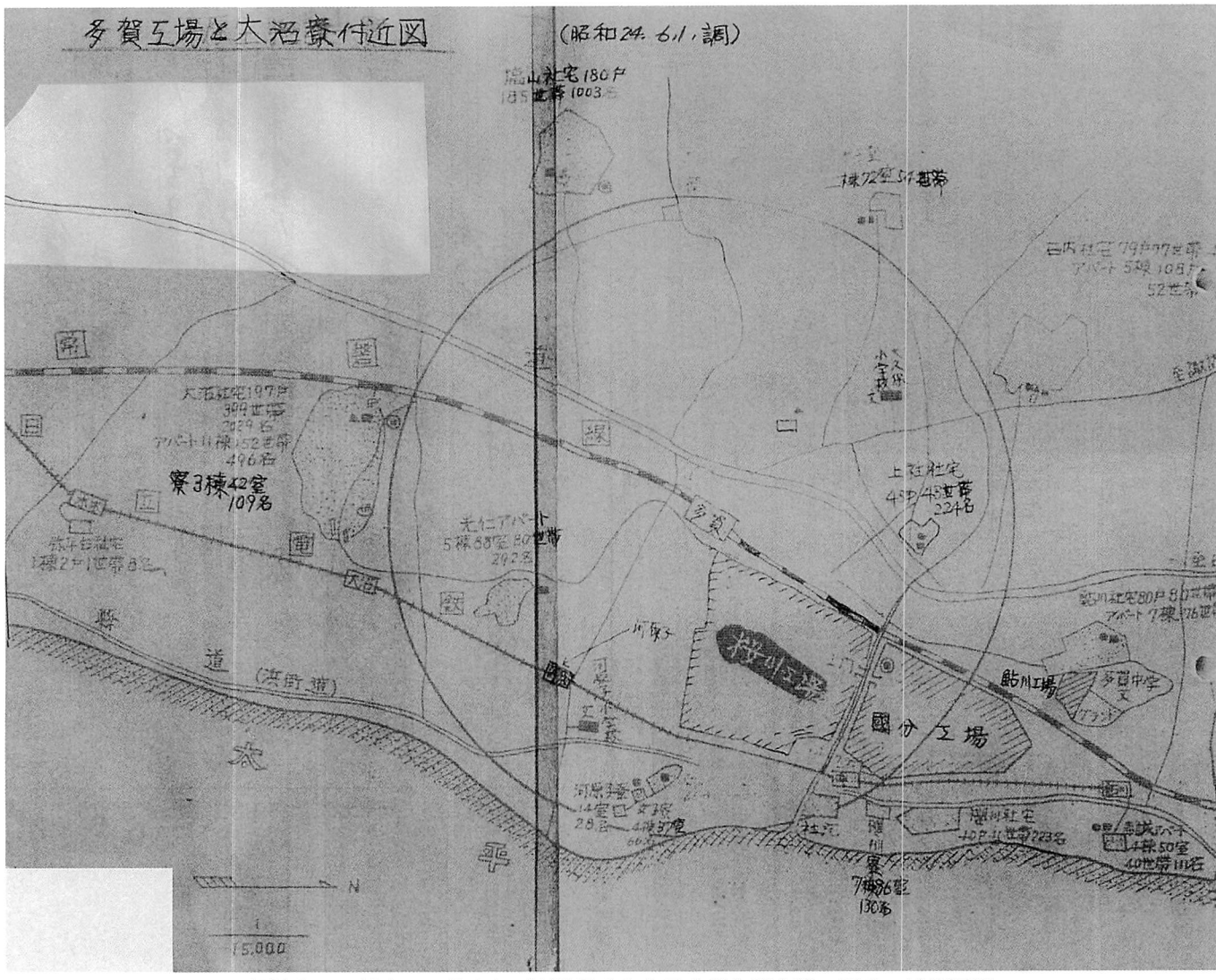
須賀川へ
郡山へ
バイパス
国道118
旧道
中野
野木沢駅
矢吹町
旧三神村
新沢一巳君の家
二瓶良一郎君の家
機銃により
有松さん宅全焼
鹿沼内採掘所
下の内
下の内採掘所
塩の平採掘所
大内採掘所
島内
焼夷弾落下
相久採掘所
相久
前田邦輝君生家
小型爆弾
大内トンネル
三森民樹君宅機銃掃射
三瓶重敏君生家
新屋敷
新屋敷採掘所
大池採掘所
池
石川沼
中島村
旧滝根村
元沢田村の
新屋敷
焼夷弾落下
阿武隈川
爆弾を埋めた
場所
当時の
医務室
農協
旧小学校
現小学校
沢田中学校
社川
土子平
沢井
王子橋
松根油を作った所
猫啼
猫啼温泉
滑走路
長さ約1500m
幅約80m
上の原
赤羽
地下本部
飛行場造りの
兵隊の兵舎
誘導路
飛行機を
格納する
場所
横穴弾薬庫
白河へ
この外小学校か兵舎として
使われた。児童は、神社や
お寺で勉強した。
国道118
水戸・郡山へ
水郡線
水戸へ
山橋へ
松根油を作った所
石川駅
立ケ岡
古町
当町
馬場町
母校
小型爆弾
荒町
今出川
南町
新町
いわき
北町
北須川
母畑へ
埋研系元素工業
扶桑第806工場
(ブルコン工場)
(現在の石川公民館の場所)
鹿の坂
ハイバス
鹿の坂

(資料提供　三森民樹、三瓶重敏　作図　前田邦輝)

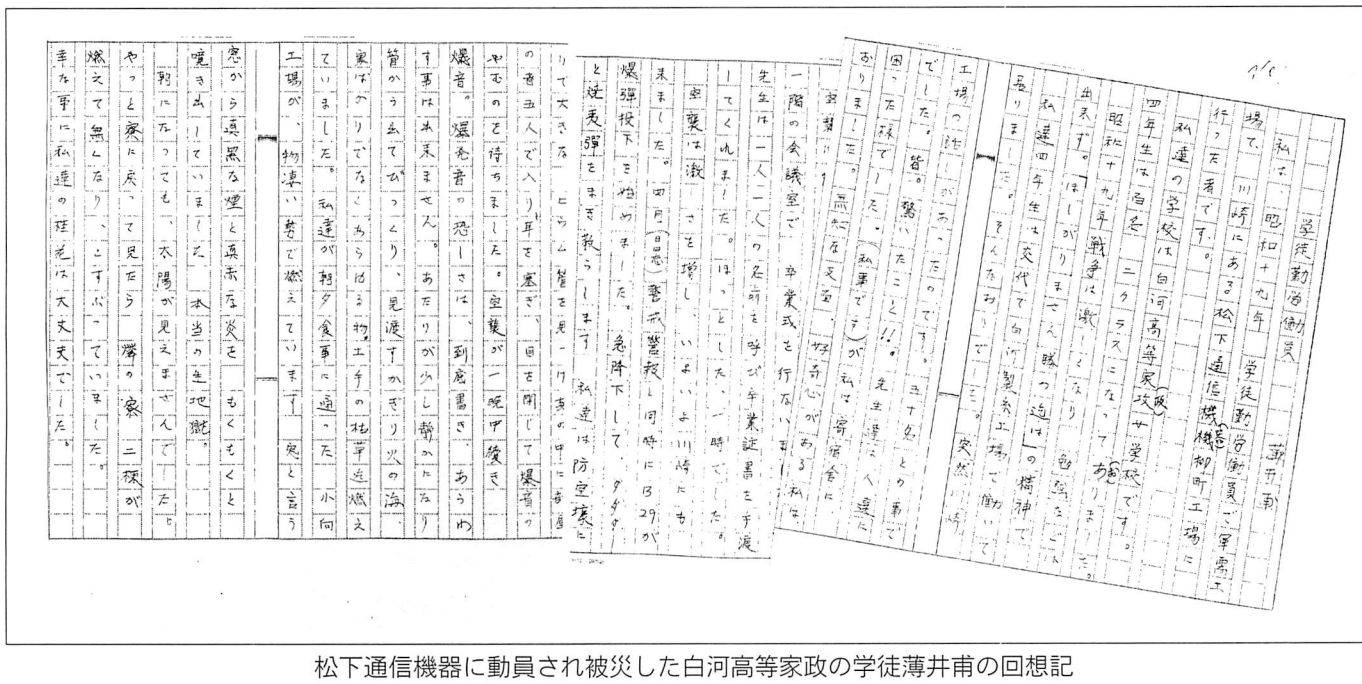
石中第41回『風雪の青春』より



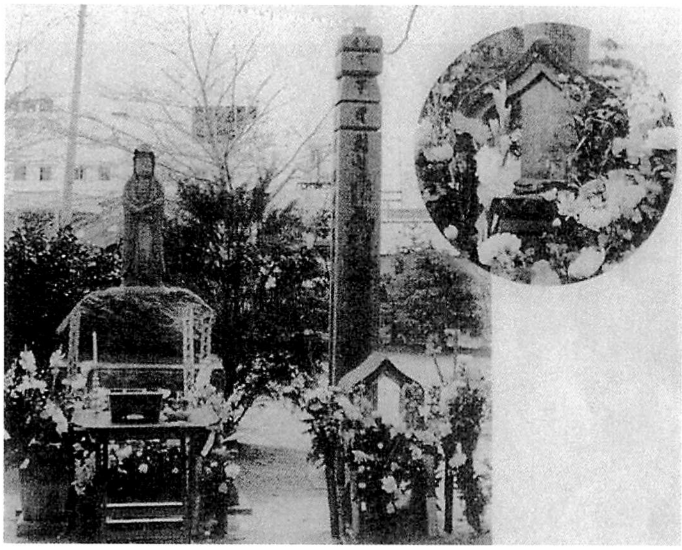
福島高女第43回卒、藍の会編
『敷島の海いまなお藍く』より



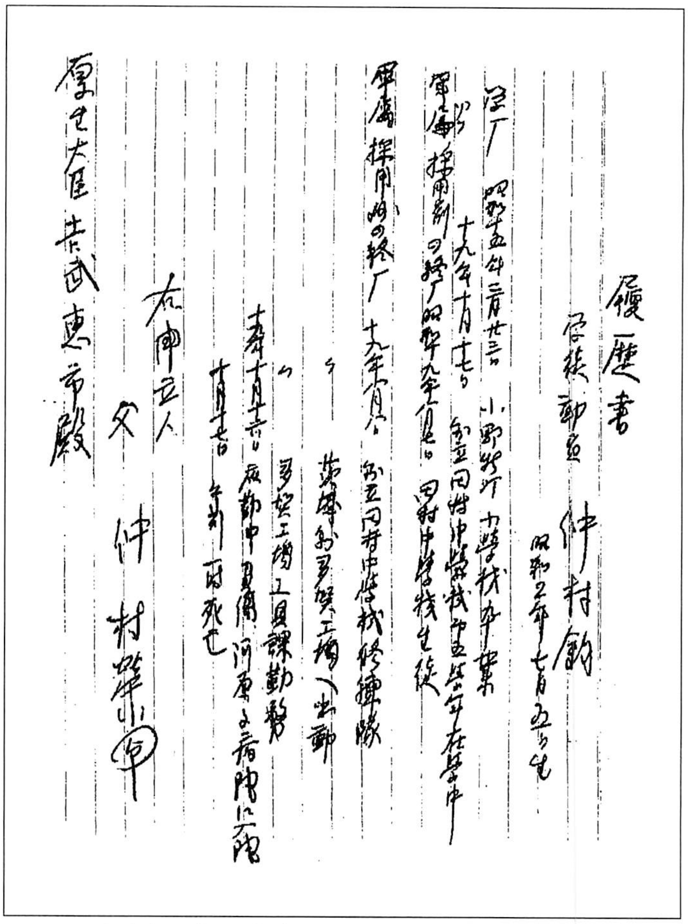
磐城中、田村中、双葉中などが動員された日立製作所多賀・国分・鮎川工場
磐城中学第46回卒業生『学徒動員の記』より



松下通信機器に動員され被災した白河高等家政の学徒薄井甫の回想記



如宝寺の供養仏・供養塔



履歴書

学徒勤員 仲村[illegible]

昭和二年七月五日生

一、昭和[illegible]年三月廿三日 小野新町小学校卒業

一、十九年[illegible]月十七日 [illegible]田村中学校[illegible]在学中

[illegible]昭和十九年[illegible]月[illegible]日 田村中学校生徒

[illegible] 十九年[illegible]月[illegible]日 [illegible]田村中学校修練隊

〃 [illegible]多賀工場ヘ出動

〃 多賀工場工具課勤務

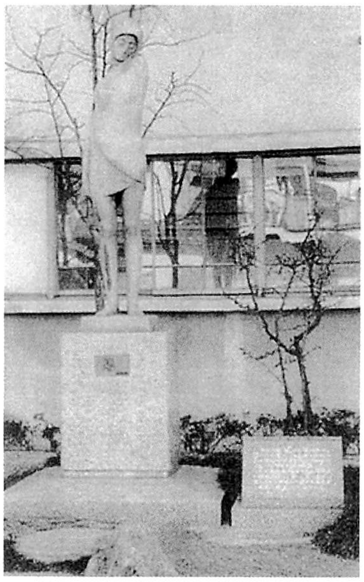
二十年七月[illegible]日 勤務中[illegible] [illegible]ニ於テ

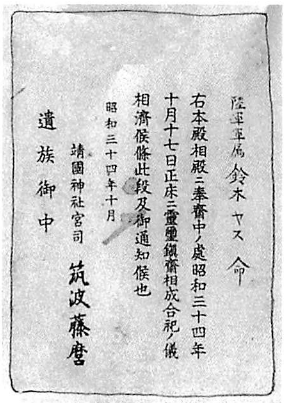
十月十[illegible]日 午前[illegible] 死亡

右申立人 父 仲村[illegible]

厚生大臣 [illegible]殿

日立多賀工場で殉職した田村中学校学徒の申立書





陸軍軍属 鈴木ヤス 命

右本殿相殿ニ奉齋中ノ處昭和三十四年十月十七日正床ニ靈璽鎭齋相成合祀ノ儀相濟候條此段及御通知候也

昭和三十四年十月

靖國神社宮司 筑波藤麿

遺族御中

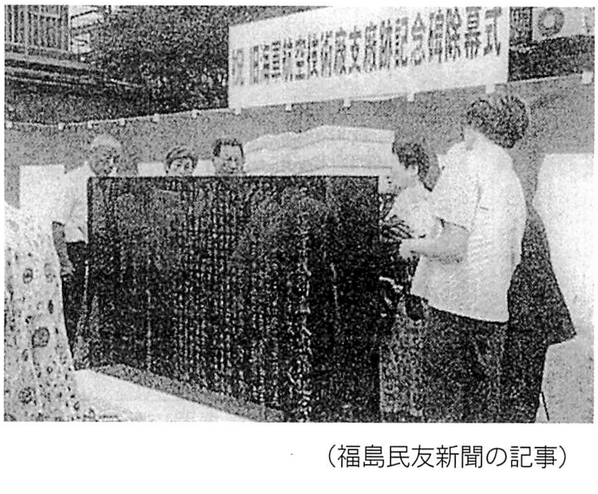
「想」の像　　　　白河旭高校

教材に用いた「蔭山日記」
（東京衡機・会津中学）

旧相馬中生ら空襲で犠牲

横浜で記念碑除幕式

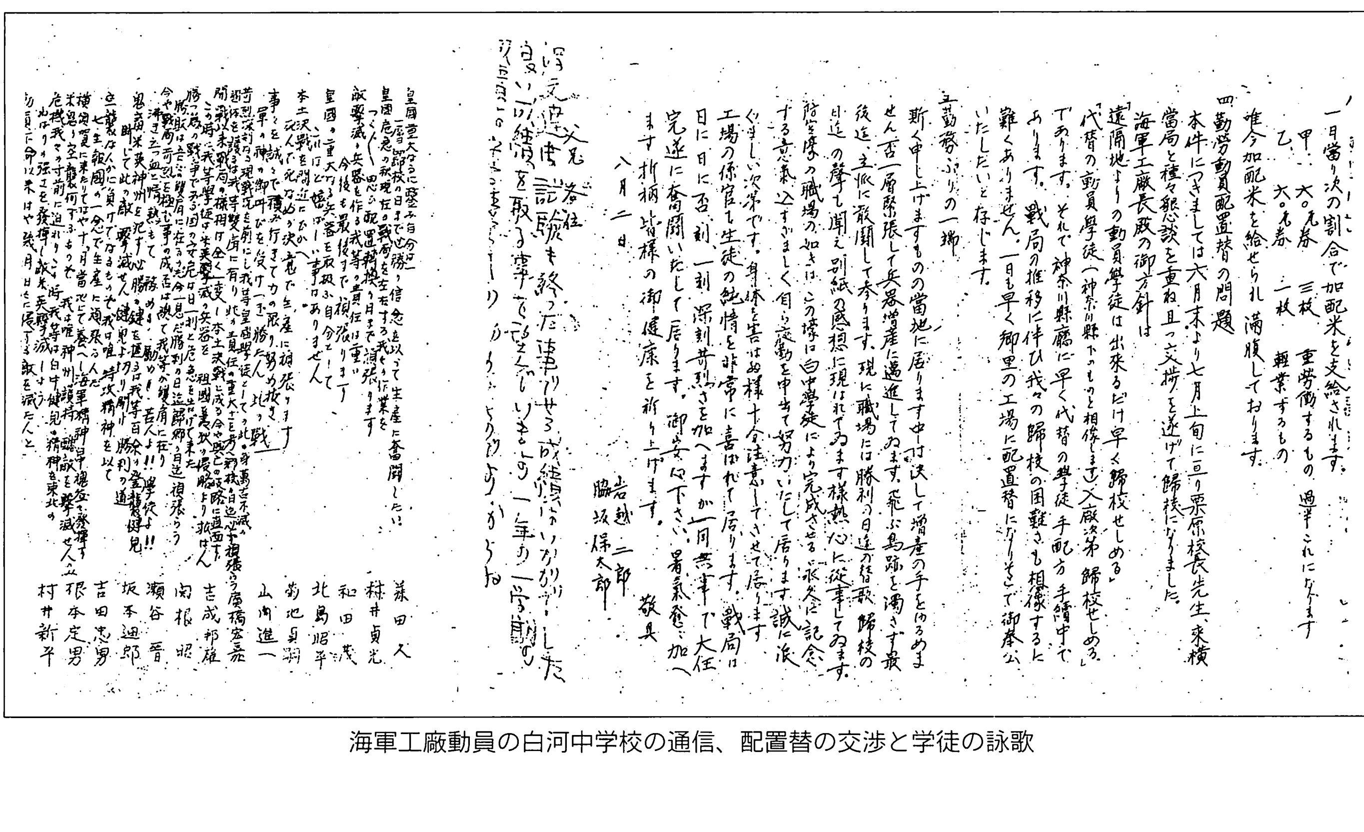
原町の熊耳さん出席「感無量」



神奈川県横浜市金沢区の釜利谷第二公園で二十日、旧海軍航空技術廠支廠跡記念碑の除幕式が挙行された。この場所にあった支廠では戦時中、学徒動員された大学生や旧制中学生が作業にあたり、空襲で命を落とした人もいた。市[illegible]見町の熊耳敏さ

（福島民友新聞の記事）

棚倉陸軍応用練習所動員の福島中学学徒の漫画


一、一月當り次の割合で加配米を支給されます。
甲、六〇瓦券　三枚　重労働するもの　過半これになります
乙、六〇瓦券　一枚　軽業するもの
唯今加配米を給せられ満腹しております。

四、勤労動員配置替の問題
本件につきましては六月末より七月上旬に亘り栗原校長先生、来横當局と種々懇談を重ね且つ交捗を遂げて帰校になりました。
海軍工廠長殿の御方針は
「遠隔地よりの動員学徒は出來るだけ早く帰校せしめる」
「代替の動員学徒（神奈川縣下のものと相像します）入廠次第帰校せしめる」であります。それで神奈川縣廳に早く代替の学徒手配方手續中であります。戦局の推移に伴ひ我々の帰校の困難さも想像するに難くありません。一日も早く郷里の工場に配置替になりそこで御奉公いたしたいと存じます。

五、勤務ぶりの一端
斯く申し上げますものの當地に居ります中は決して増産の手をゆるめません。否一層緊張して兵器増産に邁進してゐます。飛ぶ鳥跡を濁さず最後迄立派に敢闘して参ります。現に職場には勝利の日迄の合歌、帰校の日迄の聲も聞え、別紙の感想に現はれて居ります様熱心に従事してゐます。防空壕の職場の如きは、この壕は白中学徒により完成させる、永久に記念する意気込すさまじく自ら進んで勤労を申出て努力いたして居ります。誠に涙ぐましい次第です。身体を害はぬ様十分注意してさせて居ります。工場の係官も生徒の純情を非常に喜ばれて居ります。戦局は日に日に否一刻一刻深刻苛烈さを加へますが一同無事で大任完遂に奮闘いたして居ります。御安心下さい。暑氣益々加へます折柄皆様の御健康を祈り上げます。　敬具
八月二日
岩越二郎
脇坂保太郎

[illegible]

森田人
林井貞光
和田茂
北島昭平
菊地貞嗣
山内進一
廣橋宏嘉
吉成邦雄
関根昭
瀬谷晋
坂本廻郎
吉田忠男
根本定男
村井新平

海軍工廠動員の白河中学校の通信、配置替の交渉と学徒の詠歌

学徒が動員された神奈川県内の主な工場

◎印は軍関係施設・工場

川崎市北部

日本光学
北辰電機製作所
東京衡機
東北振興
東京航空計器
東京機器工業
東京兵機
住友通信工業
日立精機
帝国通信
安立電気
自動車鋳造
三菱重工川崎機器工業

川崎市中心部

明治製菓
日本鍛工
古河鋳造
東芝柳町工場
東芝堀川町工場
東芝小向工場
東芝大宮工場
東芝富士見工場
味の素
東洋通信機
池貝鉄工所
東洋ラジエター
日本気化器
東京製線
東芝特殊合金
日本内燃機
ヂーゼル自動車川崎工場
日吉製作所
東京機器工業
宇山カーボン
松尾造機
東芝鋼管
日本蓄音機
池貝自動車
日立航空機
佐久間鋳造

川崎市臨海部

三菱石油
富士通信機
東京鍛工
昭和電線電
富士電機
日本金属
日本鋼管
日本造船
日本冶金
日清製粉川崎工場
昭和組造船

相模原地区

◎相模陸軍造兵廠
浅野重工業
三菱機器

山北地区

江戸川工業所山北工場
理研山北工場
◎海軍第二火薬廠山北工場

小田原地区

富士写真フイルム
小田原印刷局
湯浅電池
小田原製紙
日加工業
日新工業
国産電機

平塚地区

日本国際航空
関東紡績
◎横須賀海軍工廠平塚分工場
◎海軍第二火薬廠

藤沢・辻堂・茅ヶ崎地区

日本精工
関東特殊製鋼
東京計器
横河電機
東京螺子製作所
松下電池
茅ヶ崎製作所
日華航空
東都製鋼
◎海軍衣料廠
◎藤沢海軍航空隊

大船地区

◎横須賀海軍工廠深沢分工場
◎海軍水路部
◎海軍燃料廠
富士飛行機
澤藤電機
三菱電機大船工場

横浜市内陸部

日本カーリット
東洋電機戸塚工場
日立戸塚
日本硝子

横須賀地区

◎横須賀海軍工造兵部・造機部
◎横須賀海軍工廠久木火工場
◎横須賀海軍軍需部・経理部
◎海軍鎮守府
◎鴨居倉庫
浦賀ドック

鶴見・生麦地区

東芝鶴見工場
ヂーゼル自動車鶴見工場
横浜ゴム
森永製菓
日東化学
日本造船
日清製粉
東芝京町工場
林鉄工所
日本特殊合金
日本製粉
佐久間鉄工所
石川島芝浦タービン
京三製作所
自動車部品製造
宝製油
東亜企業
鶴見窯業
ブリヂストン
石川島造船所
興亜炭素
日本鋳造
保土ヶ谷化学
日本電解製作所
旭硝子
東京ガス
昭和電工
キリンビール
日本音響
日本鋼管鶴見造船所
日産自動車
昭和特殊製鋼
日本タイヤ

横浜・根岸地区

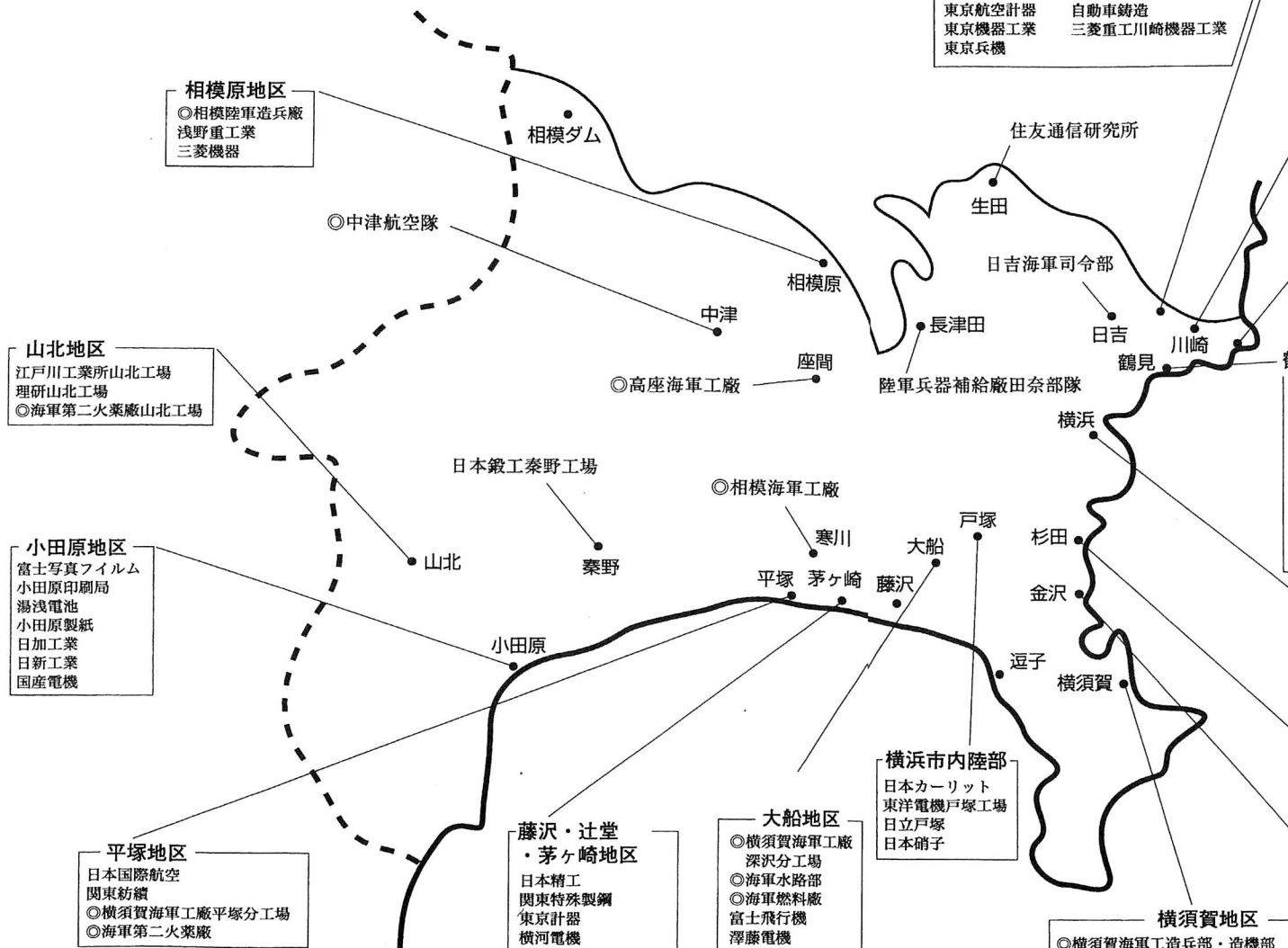
三菱重工横浜造船所
東芝間門工場
佐倉鋼鉄
野沢屋
文寿堂
横浜耐火煉瓦
古河電気工業
松屋
神奈川皮革
日本製粉
東海鉛極
同和火災
千代田火災
安田火災
日本自動車工場
日本通運
古河電池

杉田・富岡地区

日本飛行機
大日本兵器
石川島航空

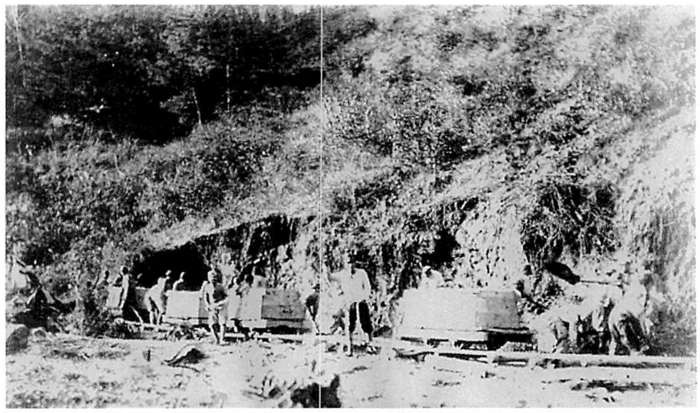
横浜南部金沢地区

◎海軍航空技術廠本廠
◎海軍航空技術廠支廠
◎海軍航空技術廠弾薬庫
日本製鋼所



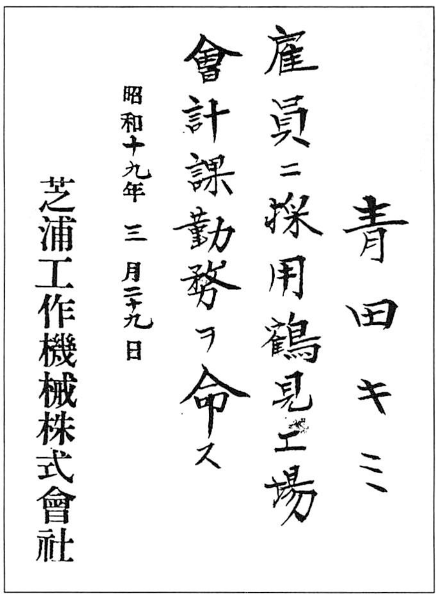
神奈川の学徒勤労動員を記録する会編『学徒勤労動員記録』（高文研）より

昭和20年　農兵隊第７中隊第２小隊全員
矢吹ヶ原修錬農場



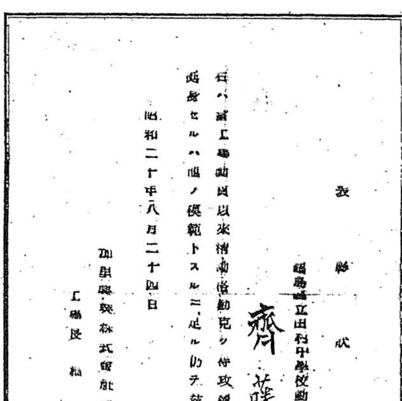
昭和20年第11中隊第３小隊
双葉郡富岡町滝ノ沢築堤工事現場

昭和20年　農兵隊第11中隊第２小隊



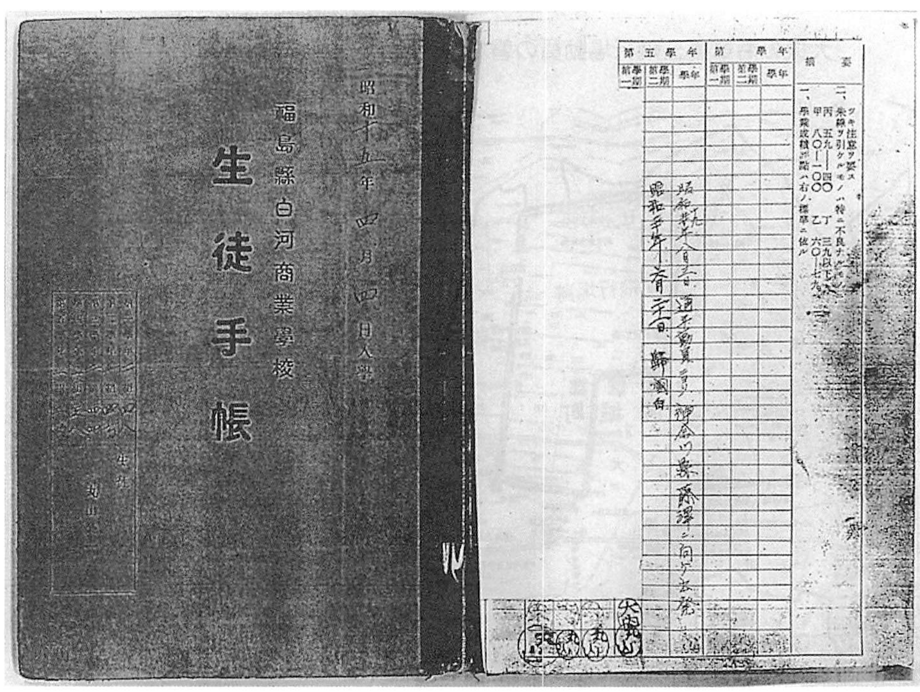
青田キミ
雇員ニ採用鶴見工場
會計課勤務ヲ命ス
昭和十九年三月二十九日
芝浦工作機械株式會社

女子挺身隊員の辞令



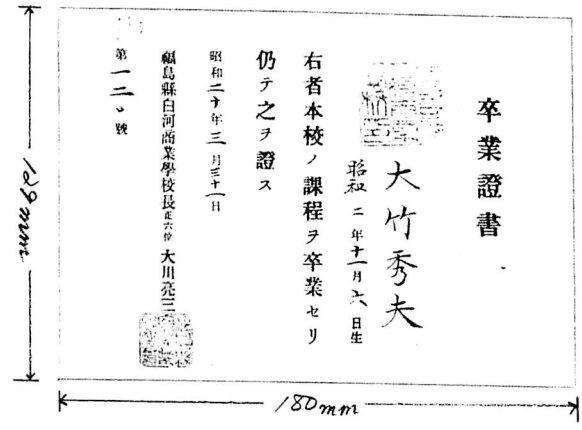
表彰状
福島縣立田村中學校動員學徒
齋藤 勉
右ハ當工場動員以来精勤恪勤克ク作業精神ヲ發揮シ生産ニ
邁進セルハ他ノ模範トスルニ足ルヲ以テ茲ニ表彰ス
昭和二十年八月二十四日
加里興業株式會社郡山工場
工場長 松井成光

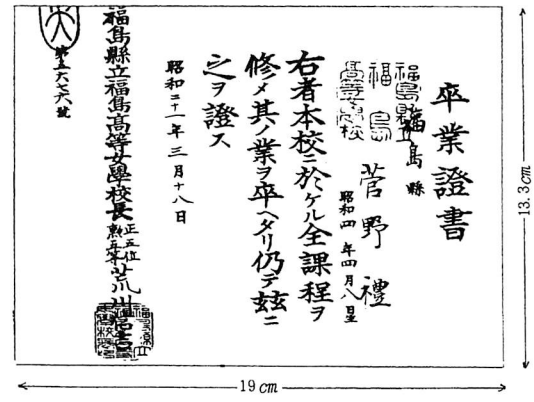
加里興業動員の田村中学校学徒の動員解除を示す唯一の証拠。



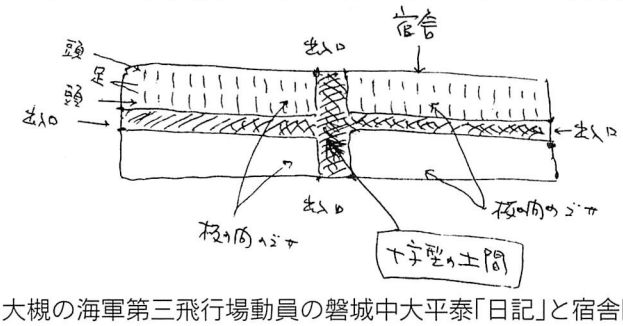
動員先、動員年月日の記録されている白河商業学校の手徒手帳

出動の日は雨だった。野辺慎一の名もみえる保原中の「日誌」





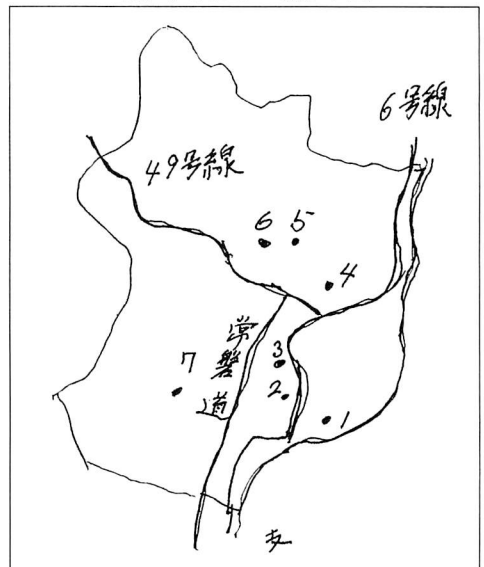
昭和二十年八月十七日（金）曇
御前七時少シスギ作業開始、作業ハ飛行場内ノ側溝堀リ。八時過ギ作業中止。以後休養。午後二時半突如作業開始命令、四時二作業終了、（休養）。全ク何ガナンダカワカラヌ有様ニハ呆レル。
忍ビ難キヲ忍ビ国家永遠ノ礎ヲ遺セ。陸海軍人ニ勅語賜フ。
※　八月十六日以降は、烏合の衆と云ったらいいのか、指示命令、連絡通報と目茶苦茶で先生方も随分と苦労されたことと思います。兎に角、頭のない人間が歩く、運転者のいない車が動くのと同じですから…
※　宿舎はバラック造りで部屋は二十畳区切り。そこに二十人が寝起きしたという生活で、今ではとても考えられない有様でした。特に悩まされたのは「蚤」と「蝨」（年配の方以外の人達は知らないでしょう知らなくて幸せです）でした。通称「マンドリン」と云われた「しらみ」の縫目にそっくり見事に揃った光景を見たら、気の弱い女性は気を失うでしょう。
※　混乱の日々を過ごして引き揚げたのは八月二十一日でした。午前二時に起床、三時宿舎出発、営門を一歩軽々しく踏み出し郡山駅へ。五時六分郡山発平駅乗換えで八時四十五分我が家へ無事到着する。
※　現在の陸上自衛隊郡山駐屯地が、数々の思い出を残し過ごした生涯忘れられない場所です。
（十八区）



大槻の海軍第三飛行場動員の磐城中大平泰「日記」と宿舎図

下館飛行場跡　ー師範学校本科２年予科３年

品川白煉瓦工場分布図



1．小名浜工場
2．湯本工場（現在）
3．湯本工場（旧）
4．平分工場
5．赤井水簸工場
6．赤井燈篭
7．黒田炭坑

福島の学徒勤労動員の全て

はじめに

チャンスを逃す

アジア・太平洋戦争中の学童・生徒・学生ならびに学校教育についての筆者の関心は、自身がその渦中に置かれた国民学校初等科在学中のわずかな体験―勤労奉仕①、爆撃と機銃掃射②、学童の集団疎開③、軍隊の学校駐屯と分散学校④、兄の出征⑤、姉の動員と就職⑥などに関する記憶と印象といった程度のものに過ぎなかった。文末に注記したような詳細を伝聞または文献によって知ったのは、後年のことであった。戦後の新制中学校⑦、高等学校⑧、大学⑨、そして教員生活の第一歩となった学法石川高等学校⑩など、その時々にも追体験の機会があったのだが、筆者の関心の薄さから、ほとんど感得することができなかった。

教員生活の大方は社会科「日本史」を担当したのだが、1975年ごろまでは、教材について特に掘り下げることもなかった。もっとも教科書自体もこの点については十分ではなかった。例えば、『新訂日本史用語集』(1969. 山川出版社)には、「学徒動員」「学徒出陣」「女子挺身隊」などの項目が収載されているものの、『改訂版詳説日本史』(1969. 山川出版社)には、これらについて、本文には記載がなく、脚注で、「また1943(昭和18)年には、在学中の徴兵適齢の学徒を軍に召集し、また学校にのこる学生・生徒も工場に動員して兵器の製作に従事させた。未婚の女性も女子挺身隊として工場に動員されるようになった。」と、補う程度であった。この傾向は、19991(平成３)年発行の『詳説日本史』でもほぼ同様であった。1998(平成10)年検定の『新日本史』は、これらの用語と説明を本文の中に取り入れ、大きく改善された。文部省の検定方針の制約を受けていたのであろうが、各社ともにこのころから、これらの項目を本文に記載するようになった。

調査の動機と目的

さて1978(昭和53)年９月に、福島高等学校では、創立八十周年に当たり、『福高八十年史』を刊行した。その編纂の過程で、旧制福島中学校には、永久保存の第一級資料としては、創立以来の「学籍簿」「成績簿」「操行録」ならびに「除籍簿」が遺されている他、「学校沿革誌」「学校日誌」「教務日誌」「職員会議録」「勤労動員日誌」の類は全く残されていなかった。福島中学校の勤労動員の全体的な輪郭は、渡辺良雄「職員会議ノート」の提供を受けて明らかにすることが出来た。横須賀海軍工廠(昭和19年度４学年)については、鴇田(ときた)完一「回想録」により、棚倉応用練習所(いわゆる釜の子)と福島フ工場(昭和20年度３学年)については、同窓生の座談会などによりおぼろげながら分りかけてきた。福島フ工場動員の宍戸俊哉の「腹が減って我慢できなくて、発破に使うダイナマイトをかじった。下痢をするけど甘いんですよ。」という証言が、記憶に生々しかった。

1990(平成２)年、福島東高等学校歴史部では、市立第二中学校出身の吉田　充の提案により信夫山の福島フ工場(中島飛行機武蔵製作所の疎開地下工場)の調査に着手した。そこには、福島中学校生の他に東京帝国大学工学部建築学科の学生も若松市内の女子挺身隊員も動員されていた。また、後に学徒勤労動員の調査を開始してからさらに私立福島電気工業学校(現学法福島高等学校)の生徒も動員されていたことがわかった。

1998年３月に、『地下秘密工場―中島飛行機淺川工場―』(1990)『新聞にみる東京都女子挺身隊の記録』(1997)の著者齋藤　勉氏の紹介で、「神奈川の学徒勤労動員を記録する会」(代表笹谷幸司)主催の「学徒勤労動員研究者交流会」に参加した。そこでは、神奈川県が、県内ばかりでなく、関東・甲信越ならびに北海道・東北からの動員状況を調査の対象にしていた。それならば、この際、送出県としても動員状況の全貌を調査し記録する必要があると痛感した。動員状況の掘り起こしは、取りも直さず戦時下の教育の実体を明らかにすることであり、動員体験世代の少年少女たちの青春にスポットを当てることにもなるであろうと、考えた。この調査は、動員体験世代の高齢化を考えると、今を置いて他にないと、考えた。

調査の方法

1998年７月に、県内旧制中等学校専門学校等への文書による照会を行い、８月に、神奈川の記録する会の呼びかけによる「福島の集い」を福島市内で開催した。同会の席上、筆者が提案して「福島の学徒勤労動員を記録する会」を発足させた。当日参加した13人の多くは、戦後教壇に立って教鞭を取られた動員体験世代の方た

ちであった。1999年７月に、神奈川の学徒勤労動員を記録する会編『学徒勤労動員の記録―戦争の中の少年少女―』が公にされた。その都度、地元の新聞・テレビ各社が記事にして会の活動を紹介してくれた。その記事に目を留めた茨城県の西村　淳氏から、発刊間もない福間敏矩著『集成学徒勤労動員』(2002)を紹介された。またご遺族から故荒川信吉『女子学徒動員』(ファイル)の提供を受けた。近時、菅野　与氏より提供された大日本教育会編『学徒動員の要領』(1944)、福間敏矩著『学徒動員・学徒出陣』など貴重な第一級資料に加えて、公文書・記念誌、体験世代の配付物・書類・日記・文集・写真など公私にわたる資料提供とアンケート・聞き取りなど多くの方たちのご協力を得た。記録が散逸・隠滅したところは、いきおい歴史学のオーソドックスな手法を補うべく座談会やインタビューなどの手法によった。

調査の対象

当初は、専門学校・師範学校・中学校・実業学校・高等女学校などを範囲として考えていたが、国民学校高等科をも対象に加えた。また、県外の大学・専門学校の学生の中の学校の疎開・工場の疎開に伴う県内への再動員などをも対象とした。

これまた当初は、学徒勤労動員だけを対象として予定していたが、学校が関与した女子挺身隊をも対象とした。

また農学校生徒が動員対象となった「興亜学生勤労奉仕隊」は、1942(昭和17)年で３カ月ではあったが、調査対象に加えた。その結果、およそ判明した学校は、大学４、専門学校６、中等学校等71、国民学校高等科71、合計152校に及んだ。

【注】

1．国民学校初等科の２，３学年(1943，44年)のころであろう。秋に、沼ノ倉の学校林へ行って上級生が伐採した松の若木を２，３人で担いだり引きずったりして学校まで運び、冬季間のダルマ・ストーブの燃料にした。短く挽いて薪を作るのは、上級生の仕事であった。その学校林に、学校からまだ熟成しない堆肥を芋篭に入れて背負って行きカボチャやサツマイモを栽培した。また芹ケ沢公園に行き、かつて競馬場の馬場として造成された広場の開墾のための草刈などの作業を行った。開墾は、上級生がおこなった。夏休みには、町内の養蚕農家を訪ねて、桑の枝を出して貰い、庭先や路地に細い杭を二本立てて桑の皮扱きをした。

2．1945年４月12日の郡山空襲は、登校日の日中で、学校の避難所＝城山の中腹の百花園に非難し、そこから爆撃機Ｂ29や戦闘機グラマンが、西方の安積盆地に急降下して行くのを眺めていた。同年８月10日の郡山空襲の時に、至近距離に爆弾が投下され、近所の住宅が機銃掃射を受けた。夏休みの日中だったので、隣組の防空壕に避難し、その状況を目近に目撃した。

3．初等科３学年(1944年)の２学期から東京都荒川区真土国民学校の学童(８月22日)40名、中野区江古田国民学校の学童(９月３日)162名が集団疎開してきた。それで午前(地元の学童)、午後(集団疎開学童)の二部授業となった。帰京したのは、終戦後の10月28日であった。班編成の集団登下校時にすれ違うだけで、それ以上の交流はなかった。学年は不明である。

4．1945年３月27日に、歩兵第155連隊(伝3375部隊)の先遣部隊が駐屯し、５月10日に連隊本部が置かれた。そのため各町内・方部別に、寺院の本堂・書院や神社の拝殿を教場とする分散学校を開設した。ただし何時から始業したか不明である。

5．1943年９月25日、修業年限短縮令(勅令)によって、大学を６カ月繰上げ卒業となり、10月初めに若松第129連隊に入隊した。

6．尋常高等小学校の高等科を卒業した当時は、町内の商店に就職したが、間もなく家庭の事情で、退職し、裁縫を修業していた。そのため1944年に女子勤労報国隊員として郡山の大日本製糸に動員された。数カ月で解除になると、町内の郵便局に勤務した。ついで1945年には、一時、監視哨に勤め、さらに東京理化という疎開軍事工場の事務所に就職し、1947年春ごろまで勤務した。

7．新制中学校の校舎は、精密工場という疎開軍事工場となっていた製糸会社「三盛社」のあとであった。ま

た教科書なしで、板書だけで「日本史」を教えてくれた、和服に草履履きの岩谷卯忠先生は、疎開軍事工場「東京理化」とともに疎開してきた方であった。数学の星留由先生は、旧制田村中学呉羽・加里動員学徒の指導に当られた方であった。

8．高等学校の社会科「日本史」の二人目の担当は、1945年５月に、東京から疎開してきた佐久間康雄先生であった。理科「化学」担当の伴野　恒先生は、戦時下の旧制中学校に在勤して、学徒隊の引率指導に当った方であった。

9．大学時代には、研究室の助手として中島飛行機伊勢崎工場に動員された学徒隊を指導引率された高橋富雄先生の「日本史」「日本史購読」を受講した。

10．学校は、戦時中に陸軍第八研究所や理化学研究所が置かれたところであった。また杉本儀蔵教頭は、保土ケ谷化学動員中の郡山空襲で、被爆死した安積中学校杉本　胖の父君であった。

凡　　例

1．本書は、福島県の学徒勤労動員の全てを明らかにすることを目指した。

2．本書では、県内設置の官公私立の専門学校、中等学校、国民学校高等科を対象とした。

3．本書では、高等女学校の過年度卒業生をもって学校あるいは同窓会が編成した女子挺身隊をも対象とした。その際、自治体などが召集、編成した女子挺身隊並びに女子勤労報国隊などについては取り上げなかった。

4．学校の名称については、本題に関わる時期に中等学校から専門学校に昇格した学校(福島師範学校)や制度的に名称変更があった学校(福島経済専門学校)もあり、事件が1943年から1945年にまたがる関係から一々書き分けることをしなかった。特に商業学校の工業化や実科女学校の高等女学校昇格など書き分けが困難なため一律に高等女学校と記したが、整合性に欠けるところもあった。例えば、1943年２月現在で、高等女学校は、福島、会津、磐城、安積、相馬、白河、喜多方、福島第二、平、郡山、若松の11校で、のち本宮、川俣、二本松、坂下、梁川、須賀川、三春、石川、棚倉、原町、保原、浪江、飯坂、小名浜、桑折、猪苗代、瀬上、植田。湯本、喜多方(後に喜多方高等女学校に合併になる耶麻実科)の20校が加わった。

5．表記については、文書等は、カタカナ交じりの旧仮名遣いとした。当時の学徒の記録(日記、手紙)等は、旧仮名遣いのままとし方言・なまり・個性的な言い回しなども明らかな誤りを除いてはそのままとした。旧漢字は出来るだけ常用漢字に改めたが、熟語や修辞については、そのままとした。また漢字制限の結果生じた代用文字や漢字カナの交じり書きは用いなかった。

6．本書中の法令・通牒・通達等については、学校史・記念誌・自治体史等の記述に頼らず、専ら福間敏矩著『集成学徒勤労動員』によった。